

電気学会 創立 125 周年記念式典 祝辞

電気学会の創立 125 周年に当たり、日本学術会議を代表してお祝いの言葉を申し上げます。電気学会が創立された明治 21 年(1988 年)は、日本における学術研究の黎明期に当たります。私ども日本学術会議は戦後の発足ですが、その前身を辿ると、1870 年代の科学アカデミー設立論に行きつきます。福沢諭吉らによって東京学士会院が設立されたのは 1879 年でした。やがて帝国学士院を経て、戦後の日本学術会議や学士院に繋がっていきます。そして 1870 年代には、物理(1877 年)、数学(1877 年)、化学(1878 年)、生物(1878 年)など基礎的科学の学会が次々と設立されました。海外から学んだ新しい学問を国内においても自律的に発展させようという意気込みが学会設立ブームを起こしたのではないかと推測できます。電気学会も、基礎と応用を含む学会の先駆例としてこの時期に設立され、わが国の近代化、戦後の経済成長、国民生活の向上に多大な貢献をなして、今日を迎えたことに改めて敬意を表します。おめでとうございます。

我が国は国として、科学技術立国という言葉が使われます。天然資源に恵まれているとは言い難い国なので、資源を加工し、製品化する技術と、それを支える科学は、国の発展を担う最も重要な手段です。その意味で、基礎科学はもとより、電気学のような基礎から応用までを幅広く含み込む学術分野が、我が国でさらに発達していくことは、我が国の将来の一層の繁栄にとって必須と言えます。

電気については、社会は、様々な課題を課し、同時に期待を抱いています。第 2 次大戦後の目覚ましい経済発展に伴って、産業と国民生活を支える電力の安定供給が求められました。地球環境問題への関心が国際的に高まるにつれ、温室効果ガスを排出しない電力供給のあり方が求められ、風力、太陽光、小水力、バイオ燃料等の再生可能エネルギーを基幹的なエネルギー源にすることはできないかという強い期待が生まれました。さ

らに、東日本大震災による原子力発電所の過酷事故で、原子力発電所の安全な管理は言うまでもなく、再生可能エネルギーや、高効率の火力発電への期待は一層強いものになっています。これらの経緯を踏まえれば、安定し、低炭素で、安全に、そして低価格で電気エネルギーを提供するための研究は、今日なお国民の大きな関心事です。

一方で、電気をエネルギー源とした種々の製品は、生活や産業の隅々に行き渡り、さらに情報通信をはじめとする分野では、日進月歩で新たな製品が生み出されています。電気製品の効率化、生活の利便性、産業の高度化のための新製品の開発など社会の要請はまだまだ続きます。私も、数年前に、大学でワイヤレス給電の実験を見て貰い、電線なき電力供給も夢ではなくなっていることを実感しました。本学会に関連する研究の進展で、様々な夢が一つでも多く実現することを願っています。

また、数年前に、東南アジアのある国を旅した時に、幹線道路をドライブしながら、市街地を離れると、電線が無くなるのに気が付きました。自然に馴染んだ集落の佇まいという景観は悪くないと感じながらも、自家発電に頼る生活には不自由な点が多いと想像しました。アジア、アフリカなどには、発電所や電力供給網が整っておらず、電気の恩恵に十分に浴していない国々があります。こうした国々の皆さんに、いかに早く、必要な電気を利用することができるようになるかを考え、協力することも日本の専門家の重要な役割のひとつです。

125周年を通過点に、電気学会がますます発展し、日本及び世界へより大きく貢献されることを祈念し、お祝いの言葉とします。

2013年10月11日(金)
日本学術会議会長 大西隆